

朝鮮版『国民文学』について

神谷 忠孝

“On Korean Literary Magazine *Kokumin Bungaku*”

KAMIYA Tadataka

Abstract: “On Korean Literary Magazine *Kokumin Bungaku*”

In this thesis, *Kokumin Bungaku*, the Korean literary magazine written in Japanese, which was published from November 1942 to May 1945 in Korea, is taken under consideration. I will examine the intention of this magazine, focusing on the claim of the chief editor Che Chesu, and consider the actual situation of “Naisen Ittai” (the Japanese policy of Korea being thought of as a part of Japan).

はじめに

1939年10月、総督府のきもいりて「朝鮮文人協会」が設立され、翌年、『東亜日報』、『朝鮮日報』、『新世紀』などが強制的に廃刊させられた。1941年11月、『国民文学』が創刊され1945年5月号まで刊行された。「内鮮一体」の実践である。緑蔭書房が復刻版として1997年11月から1998年4月まで、合本全12巻を刊行した。主幹を務めたのは崔戴瑞であり、韓国では親日派の代表という扱いである。この際、日本人の側から『国民文学』の内容を検討することに意義があると考え、研究の対象とした次第である。

I 崔戴瑞

『国民文学』の編集兼発行者であった崔戴瑞（チェ・チェソ）について先行文献をもとに経歴を記す。1907年、朝鮮黄海道海州郡海州に生まれた。1916年、海州公立普通学校（小学校に相当）に入学。父は裕福な農家であった。ソウルの京城第二高等普通学校（旧制中学校に相当）を卒業。1926年、京城帝国大学予科に進学し、二年後に法文学部英文科を選択。1931年、第三期生として卒業した。大学院に籍を置きロンドン大学で修学。帰国後の1933年から京城帝大英文科講師をつとめるかたわら、文芸批評でも活躍し、1938年に朝鮮では最初の文芸評論集『文学と知性』（人文社、1938）を出版、1939年には文芸誌『人文評論』を創刊した。専門はT・E・ヒュームを出発点とし、リチャーズ、エリオット、リード、ルイスにいたる流れを「主知主義」として展開するもので、西洋的知性の紹介に重きをおいた。『人文評論』ではジョイスの「青年芸術家の肖像」、トーマスマンの「ブッテンブローク家の人々」、ハックスレイの「対位法」、マルローの作品を論じた。

1941年11月、朝鮮の文芸誌が『国民文学』に統合され編集兼発行人となってからは日本語による創作を石田耕造という日本名で発表し、崔戴瑞の名前で評論活動を展開。1943年には日本語の評論集『転換期の朝鮮文学』（人文社）を出版した。日本の敗戦による解放後は現在の延世大学校人文科大学英文科の教員となり1964年に亡くなった。

評価については、親日派の代表格の扱いである。林鐘国は『親日文学論』（平和出版社、1966）で、「一九四〇年代の崔戴瑞の文学活動は、原則論、時局論、作品論（月評のたぐい）、座談会の司会および参席、文芸誌の編集といった五大項目に分類できる。この他に大東亜文学者会談および全満芸文家会議参席、その他の社会活動があり、また単行本の発刊などがある」として、各項目について具体的に親日行為を暴いた。金允植は『傷痕と克服』（朝日新聞社、大村益夫訳、1975）で、合理的知性が「内鮮一体」という全体主義史観に屈服したさまを、戦時下日本の『文学界』派による「近代の超克」論議と重ね合わせて論じている。小林秀雄と崔戴瑞の類似点を説明するところは説得力がある。

李建志は『朝鮮近代文学とナショナリズム』（作品社、2007）の第3章「総動員体制下の朝鮮における支配言語と母語」で崔戴瑞を大きくとりあげている。李建志は、崔戴瑞が親日を選んだことについて、「それは彼の従来の思想をねじ曲げたものではなく、むしろ彼の思想にひそんでいた「国家主義的秩序」として、「内鮮一体」の「国民文学」がとらえられていたように思われる。そういった意味で崔戴瑞の思想には一貫性があるといえる。」という見解を述べている。崔戴瑞が日本語で評論を書いた理由について、日本がかかげた「大東亜共栄圏」の共通言語としての日本語に自分の夢を託したのではないかという説を展開している。このことは、日本語で作品を発表した朝鮮の文学者についても当てはまる説である。支配者側の言語に屈したのではなく、敢えて支配者側の言語によって自己を表現する道を模索したと考えれば、従来の親日派文学者の見方も変わってくるように思う。

Ⅱ 『国民文学』の意図

創刊号の巻頭言「朝鮮文壇の革新」に次の3点が列挙されている。

本誌「国民文学」は朝鮮文壇の革新を図るべく新しき意図と構想の下に生れ出た。新しき構想とは何か？第一に重大な岐路に立つ朝鮮文学の中へ国民的情熱を吹込むことに依つて再出発せしめること、第二に梢々もすれば埋没されさうな芸術的価値を国民的良心に於いて守護すること、そして最後にこの狂乱怒涛の時代にあつて常に变りなく進歩の味方となること。要するに「国民文学」は国民と芸術と進歩に献げられたものである。この栄えある躍進の時代にあつて本誌は微力ながら国民と文学のために献心の努力を払ふであらう。

この意図をもっと具体的に示したのが崔戴瑞の「朝鮮文学の現段階」（『国民文学』1942・8号）である。

- (一) 国体観念の明徴 国体に反する民族主義的、社会主義的傾向を排撃するは勿論のこと、国体観念を不明徴ならしむるが如き個人主義的、自由主義的傾向を絶対排除す。
- (二) 国民意識の昂揚 朝鮮文化人全体が常に国民意識を以て物事を考へ且つ書くやう誘導す。特に盛上がる国民的情熱をその主題に取入れるよう留意す。
- (三) 国民士気の振興 新体制下の国民生活に相応しからざる悲哀、憂鬱、懷疑、反抗、淫蕩等の廢

頽的気分を一掃すること。

- (四) 国策への協力 従来の不徹底なる態度を一擲し積極的に時難克服に挺身す。特に当局の樹立せる文化政策に対しては全面的に支持協力し、それが個々の作品を通じて具体化するよう努む。
- (五) 指導的文化理論の樹立 変革期に遭遇せる文化界に指導的原理となるべき文化理論を一日も早く樹立すること。
- (六) 内鮮文化の総合 内鮮一体の実質的内容たるべき内鮮文化の総合と新文化の創造に向つてあらゆる智能を総動員す。
- (七) 国民文化の建設 総じて雄渾、明朗、闊達なる国民文化の建設を最後の目標とす。

そして崔戴瑞は、〈今後日本文学は一方その純粹化の度を益々高めると同時に、他方その拡大の範圍を益々拓げるであらう。前者は伝統の維持と国体の明徴に連なる一面であり、後者は異民族の抱擁と世界新秩序とに連なる一面である。前者を天皇歸一の傾向と云ふならば、後者は八紘一宇の現れと云ふべきであらう。〉と述べた。これを読むと、朝鮮文学は日本語で書くことで日本文学の枠組みに入るのは必然であり、むしろ日本文学の進展をうながすという考えであったことがわかる。九州文学や北海道文学と同じ系列に朝鮮文学が位置づけられようとしたのである。最初の構想では年4回を日本語、残りを朝鮮語版（ハングル）とするものであったが、1942年5・6月合併号からハングルが消えたのは、編集者の意図だったことがわかる。

Ⅲ 創刊号

京城大法学部教授の尾高朝雄は「世界文化と日本文化」で、朝鮮の今後の文化政策として、第一は日本文化を基調とすること。第二は朝鮮文化の特色を生かすこと。第三は、〈それが共に将来の世界文化たるべき新東洋文化の創造といふ大目標を志向しつつ画策されねばならぬ〉と主張した。緑旗聯盟主幹の津田剛は「革新の方向と論理」で、〈半島は自己の旧習を脱皮し、自由主義的雰囲気をも脱皮し高度日本文化圏の一員として再編成されなければならない〉と述べた。緑旗聯盟は1933年に設立した「内鮮一体」を推進する団体で、会長は京城帝大予科教授・津田栄、その弟が剛である。1939年11月に『今日の朝鮮問題講座』全6巻を刊行した。朝鮮文人協会幹事長・芳村香道は「臨戦体制下の文学」で、〈文学の戦時体制とは、国家的目的を作家の目的とし、国家の思想を作家の意識内容に取り入れて、戦時国民意識を昂揚し、国民の情緒を国家精神に組織する任務を果たすことにある〉と主張した。これらの論文は儀礼的なもので内容に新味はないが、当時の朝鮮で指導的な位置を占めていたのは誰かを知る資料にはなる。

崔戴瑞は「国民文学の要件」の最後で文学者の心構えとして、〈単に自分や他人を楽しませるために、或は自己の苦悩から救はれるために文学を創るのではなく、国民に教へるために、国民を形作るために書くと云ふ激しい意欲がなくては真の国民文学は生れないであらう。であるから作家は先づ文学は表現なりと云ふ觀念を捨て、文学は、否文学こそは教育なりと云ふ信念を掴まねばならない。そして自分の書いてあるものを若い人々が読んで果してどう云ふ影響を受けるであらうかを常に考へなければならぬ。ここからして作家的使命は目醒めるのであらう〉と、国民を教育するつもりで書くことを提案した。

座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」の出席者は、京城大法学部教授・辛島暁、京日学芸部長・寺島瑛、毎新学芸部長・白鉄、評論家・李源朝、それに芳村香道、崔戴瑞である。白鉄は東京高師に学び日本のプロレタリア文学を朝鮮で展開したことがある。発言の中で注目されるのは、崔戴瑞が〈日本文化の一翼として朝鮮の文学は再出発する。さうすると今までの日本文化それ自体がやはり一種の転換をやつてゐるわけです。もつと広いものになるわけです。さうすると今までに内地的文化になかつた或一つの新しい価値が朝鮮文化が転換したことによつて附加される。さういふことがなければ、本当の意味はないと思ひます〉という発言である。日本の文化に活力を与えるような朝鮮文学を目指すという積極性がうかがえる。これに続けて白鉄は、〈崔君が言つてゐるのは、朝鮮文学が日本文化の一翼として出発する場合にそれが何か新しい価値をプラスして日本文学を豊富にすることがなければ何の意味もないと云ふことでそれは当然な話だと思ひます〉と補足している。

詩を発表しているのは、京城大英文学教授の佐藤清、朱耀翰、杉本長夫、林学珠、金村龍濟などで、佐藤清は崔戴瑞の恩師、金村龍濟は朝鮮名を金龍濟と云い日本の中央大学に学び、日本でプロレタリア詩人として活躍した時期がある。

金東仁は平壤生まれ、小学校を終えて日本に渡り東京学院、明治学院中等部を経て1918年、川端函学校に入学。此の頃から文学修行をはじめ、1919年、朱耀翰、田栄沢らと朝鮮初の文芸同人誌『創造』を東京で発刊した。「朝鮮文壇と私の歩んだ道」は半生の回顧であるが、〈自白するが今迄は私は国家に対し何等感謝の念も持たない自由主義の人間であつた。此の事変に於て同じく戦争をしながら彼等は苦しみ我等は安楽に観戦し得る現在の状況を体験し初めて国家に対する謝恩の念と軍に対する謝恩の念を強く感じたのである〉というように書いている。日本での生活が長いせいか、日本人になりきって書いている印象を受ける。

創作は、李孝石「薊の章」、田中英光「月は東に」、李石薫「静かな嵐」、鄭人澤「清涼里界限」、宮崎清太郎「父の足をさげて」の5編。李石薫は早稲田高等学院に学んだことがあり、創氏名は牧洋。李孝石は同伴者作家として出発した。「静かな嵐」は、朝鮮作家協会の作家たちが文芸講演隊を作つて日本軍が戦っている前線に慰問に行く準備をする話である。もうひとつの話として親しくしていた作家が密告によって警察に逮捕されたことを知り、妻と相談した末に書齋にあるロシア文学関係の書物を燃やそうと決心するという内容である。日本で実施されていた治安維持法が同時代的に朝鮮でも適用されていたことがわかる。「月は東に」は中国戦線での兵士として体験を書いた作品である。

Ⅳ 太平洋戦争勃発後の『国民文学』

創刊号のあと1カ月休刊して2号は1942年1月に発行された。巻頭言は「大東亜戦争の意義」と「智識動員の拡充」の2本である。座談会「日米開戦と東洋の将来」の出席者は、海軍武官・黒木剛一、総督府情報課長・倉島至、三千里社長・白山青樹、京城帝大法学部教授・鈴木武雄、基督教朝鮮監理教団朝鮮本部主事、沈明、警務局保安課長・古川兼秀、普成専門法科科長・愈鎮午、崔戴瑞など。愈鎮午は京城帝大の講師で共産主義に関心を見せたことがある同伴者作家である。もうひとつの座談会「文芸動員を語る」の出席者は、辛島暁、寺田瑛、津田剛、白鉄、古川兼秀のほかに京城日報編輯局長・嶋元勤、京城保護観察所長・長崎祐三、総督府図書課長・本多武夫、緑旗連盟・星野相河、総督府保安課・松本泰雄、総力聯盟文化部長・矢鍋永三郎、放送局第二放送部長・八幡昌成、評論家・

林和、それに崔戴瑞などである。林和は日本留学から帰国後朝鮮プロレタリア芸術同盟（カップ）の書記長をつとめた詩人・文芸評論家。解放後、北朝鮮に渡ったがアメリカのスパイとして死刑の判決を受け処刑された。中では崔が、作家を動員するにしても自己修養の段階が必要であると述べ、〈要するに動員といふのは国家が必要なところに必要な人員を配置することで、科学の場合は主観性が希薄だから比較的簡単にゆく、それに目標もちやんと樹つてゐる。そこで今日見るが如き科学動員が出来た訳です。ところが文学の場合は、主観的な要素も多い上に、尚さういふ目標が立つてゐないから益々遅れたのでないかと思ふのです。だから両面から見て行くべきではないかと思ひます。そこでその目標といふものが切実に研究されるべきではないかと思ひます。〉と述べているのが印象に残る。荻原浅男（京城帝大法学部助教授）の「古典に現れたる日本精神」、森田芳夫（緑旗日本文化研究所員）の「日本文化と半島」、矢鍋永三郎の「大東亜戦争と文化生活」、星出寿雄（警務局事務官）の「演劇統制の諸問題」などの日本人による論考が載っている。鄭寅の「西洋文学への反省」は朝鮮における西洋文学の受容史である。白鉄の「旧さと新しさ？戦時下の文芸時評」は国民文学の方向として、〈要は偉大な理想、浪漫を我が新文化新文学の偉大な精神となし、それを克明に描くには、ロマンチズムとリアリズムを同時に挙用して、それを二つの国民文学の大きな性格にしたいものである〉と述べている。

崔戴瑞の「子よ安らかに」は満3歳で世を去った四男への追悼文である。『国民文学』の創刊号の準備で走りまわっているときに発病し、創刊号の新刊広告が新聞に発表された日に亡くなったことが書かれている。「今後如何に書くべきか？」という欄に三十余人の回答が載っている。日本人は詩人の則武三雄、椎木美代子、寺本喜一、小説家の田中英光の4人。あとは朝鮮人だが当時の朝鮮文壇で活躍していた状況を知るたがかりになるので列挙する。詩人では金尚鎔、朱耀翰、盧天命、尹崑崗、徐廷柱、金起林、金村龍済、李燦、柳致環、小説家では金東仁、咸大勲、李孝石、李善、石仁海、李根栄、鄭人澤、朴啓周、尹世重、李北鳴、桂鎔黙、鄭飛石、金永寿、愈鎮午、評論家では李軒求、金午星、安含光、韓植などである。

詩を発表しているのは竹内てるよ、金鐘漢、寺本喜一、田中初夫、金析朱、趙宇植である。創作は韓雪野「血」、湯浅克衛「金海きよ子」、愈鎮午「南谷先生」、那珂孝平「職場だより」、金史良「ムルオリ島」の5編である。韓雪野は日本大学で学んだ後に帰国してカップ創設に参加して代表的なプロレタリア作家となった過去がある。金史良は佐賀高校から東大に学んだ。「光の中に」が1939年度の芥川賞の最終候補になったことで有名である。

「編輯後記」で崔戴瑞は、〈十二月号（諺文号）を又もや休んでしまつた。率直に云ふと、原稿が集まらなかつたのである。それに対して編輯部員一同は責任を痛感してゐる次第だが、然しこの場合は編輯部の陳謝だけでは済まされない何者かがある。文人達の動揺や彷徨が意外にも深刻であることを発見した。〉と書いている。諺文号が実現するのは1942年の2月号と3月号である。2月号の日本語文章は、「シンガポール遂に落つ」、奥平武彦「大東亜の大目的とその性格」、詩は佐藤清「獅港」、金村龍済「宣戦の日に」、百瀬千尋「英東洋艦隊撃滅の歌」、杉本長夫「梅の実」、児玉金吾「神の弟妹」、座談会「大東亜文化圏の構想」である。座談会は崔以外日本人である。注目すべき発言は崔の次のような主張である。

共栄圏に於ける共通語としての日本語といふものを考へる場合に、英語が先づ商業語として世界

に普及されたやうに、差当り経済的の基礎の上に立つて国語を大東亜共栄圏の共通語とすることは充分可能があると思ひます。更に又文学語、學術語としても日本語を東亜共栄圏内の共通語とすることを考へなければなりません。英語やドイツ語が學術語として便利なのは、一つ知つて居ればどの国の著述でも翻訳があるから読めるからであつて、今後は日本語で西洋のあらゆる色々な學術的なもの或は文学作品が翻訳されてあるといふ風にすることが日本語を學術語として確立する上に必要な力になると思ひますがどういふものでせうか。

崔戴瑞という人は迎合的な親日ではなく、日本の大東亜共栄圏構想を本気で信じていたところにある。日本語圏に積極的に参入し日本人と対等に文学の将来を考えていたように思われる。もうひとつの提案として、ノーベル賞のように、満州、朝鮮、支那の日本語文学に文学賞を授与すべきとも発言している。

3月号は座談会「半島の基督教革新を語る」と崔戴瑞の「私の頁」が日本語で、あとはすべて諺文である。「私の頁」では、「国民文学とはどんな文学ですか？」と問われれば、「それは日本国を代表するやうな文学でせうね」と答えると云い、つまり、「国民文学とは日本国の代表性を持つが如き文学である」と定義している。目標とするところは世界文学であるという雄大な構想が書かれている。

V 1942年4月号以後の『国民文学』における崔戴瑞の主張

「徴兵制実施の文化的意義」(1942年5,6合併号)は5月8日に閣議決定を見た徴兵制について、(1)〈半島人は国民的資質に欠けてゐるのではなく、修練の機会に恵まれなかつたとする吾人の立場よりすれば、この度の決定は二重の喜びを齎す〉、(2)〈半島人は徴兵の実施を機会として確実に而も永久に祖国観念を把持するであらうことが予想せられる〉、(3)〈徴兵制実施に依つて半島人の資質が急激に向上せしめられることが考へられる〉という3点を挙げて賛意を表明した。文学との関係については、〈今日朝鮮の文学が云ひようのない行詰りを来した根本の原因は作家達に国民的な情熱が希薄だつたことにあるのである。(中略)国民的情熱と云ふものは説得や勧誘や、況してや命令や号令に依つて生ずるものではない。祖国のために自ら血を流し生命を捨てて闘ふ所から国民的な情熱は油然と湧き出るのである。そしてそれが詩となり、小説となるのである。今日以後も早詩人や小説家は題材に困ることも、執筆態度につけて思ひ悩むことも無いのである。凡ては決定された我々の義勇奉公の精神を俟つのみである。〉と述べている。

「新しき批評のために」(1942年7月号)で注目されるのは「外国文学の再評価」を主張していることである。外国文学研究者に世界文学史を書くことを奨めている。その利益として、(1)〈我々の批評的立場が明瞭となり、将来日本的批評体系を樹立する上に於いて有力な助けとなるであらう。〉(2)〈これに依つて外国文学の批判がただ抽象的にでなく、具体的になされ得るであらう。〉(3)〈将来外国文学を採入れる上に於いて企画的な統制案がこれに依つて暗示されるであらう。さうなれば外国文学一切罷りならぬと云ふ議論も、又外国文学なら何でもよいと云ふ盲目者流の議論も同時に消滅するであらう。〉と書いている。英文学者らしい意見であり、戦時下の日本論壇と比較すると崔戴瑞の冷静さが際立つ。「まつろふ文学」(1944年4月号)は「石田耕造」の筆名で発表された。それ以前に「石田耕人」という筆名で文芸時評を書いたことがあるが、創氏名を名乗ることになったいきさ

つを書いているので取り上げておく。〈まつろふ文学は、天皇に仕へ奉る文学である。〉という書き出しではじまり、やがて核心にせまる次のような文章があらわれる。

問題はいつも簡単明瞭であつた。君は日本人になり切れる自信があるか？ この質問は更に次のやうな疑問を起した。日本人とは何か？ 日本人となるためにはどうすればよいのか？ 日本人たるためには、朝鮮人たることをどう処理すればよいのか？

これらの疑問はもはや、知性的な理解や理論的な操作だけではどうにもならない、最後の障壁であつた。然しながらこの障壁を突き抜けない限り、八紘一字も、内鮮一体も、大東亜共栄圏の確立も、世界新秩序の建設も、総じて大東亜戦争の意義が判らなくなる。祖国観念の把握と云つても、それらの疑問に対する明確なる解答を持たぬ限り、具体的、現実的とは云へない。

ここで私自身の体験を述べよう。私は昨年暮頃からいろいろと自己を処理すべく深く決意し、元旦にはその手始めとして、創氏をした。そして二日の朝、そのことを奉告のために、朝鮮神宮へお参りした。大前に深々と首を垂れる瞬間、私は清々しい大気の中に吸ひ上げられ、総ての疑問から解き放たれたやうな気がした。

このあと、日本の古代文学、本居宣長、ギリシャ神話などを援用しながら文学の起源が「祭り」であるという説を展開している。日本浪漫派のたとえば保田與重郎の文章を読んでいるやうな気がしてくる。日本人になりきろうとした崔戴瑞の到達点のひとつである。本心はどうだったのだろうか。

VI 田中英光「酔いどれ船」の「崔戴瑞」像

田中英光の『酔いどれ船』（小山書店、1949）は、1941年に朝鮮文人協会の常任幹事となり、崔戴瑞、李無影、愈鎮午らと交流した体験を「亮吉」という作者の分身を主人公にした作品である。中でも存在感のある人物として描かれているのが「崔健栄」という名前で登場する崔戴瑞である。少し長くなるが実際に接した作家の証言として引用する。

亮吉は起きて、下の食堂にゆき、ボーイに金をやり、大きなコップにウィスキーを半分ほど貰う。そしてスタンドに凭れ、それをチビチビやっていると、腹の温たまつたころ、軽石のような仏頂面で崔健栄が入ってくる。このひとは昔、京城帝大始まって以来の好成績で、英文科を卒業し、かつてはマルクシズム文芸理論家として、朝鮮第一の人物だったという。その故か、石のような頑固さがあり、今でも時によると、本府の役人なぞに、火の玉のような勢いで食って掛かる。役人はしまいは、いつも権力で、相手を圧倒する。そんな風に圧倒された時の、崔の口惜しそうな顔は見ているひとの心まで、暗く悲しくする程の凄まじさだった。それ故、誰もがいま、崔の胸に一物あり、率直に生きていないのを感じている。だがそれだけに、彼の裏面の生活はやはり日本の軍官権力と結びついていたものと想像される。だから、彼は泣いても泣き切れぬやうな、やりきれぬ生活をしているのだろう。酔った時の酒癖の悪さは有名だった。唐島博士でも、都田二郎でも見境ない。腹の底から軽蔑している態度で、泣くがごとく怒号し、手もとにある皿小鉢を、手当り次第に、叩きつけるのだった。その彼が、亮吉を、酒飲みとして嫌い、バカにしている。今も、亮吉が、お早

うをいっても、亮吉のコップをじろりとみただけで、碌な返事もしない。(中略)

突然、亮吉は、このさまよえるユダヤ人みたいな崔に、焼けつくような愛情を感じる。崔の不幸を自分の不幸に似ていると思うのだ。もっと酔っていたら、いきなり、崔ののんにく臭い唇に接吻して泣き出したかもしれない。亮吉はニヤニヤとおもねるように笑う。その笑いが崔の激怒を誘発した。「君は酔っている。出てゆきたまえ」崔は立上がると亮吉の腕を掴んで、つき飛ばした。恐ろしい力だ。おまけに、崔の憎しみが、電気のように亮吉を痺れさせ、無力にする。このように全身で憎悪され、軽蔑されている怒りには、こちらが悲しくなってしまう。亮吉は、反射的に抵抗してみたが、そんな自分を醜くみっともなく思っているうちに、たちまち廊下の外に、つき出されてしまった。

この中に出てくる「唐島」は「辛島」、「都田」は「津田」で、『国民文学』の常連執筆者である。この部分だけ読むと田中英光は崔戴瑞に嫌われていたように思うが、『国民文学』の創作欄で起用されているのは、日本人では田中英光が群を抜いている。ここで描かれている崔戴瑞の姿からは、日本人に憎しみをもちながら「内鮮一体」を推し進めていた様子が見えてくる。

Ⅶ 『国民文学』再評価の一視点

1942年7月号は朝鮮に徴兵制が実施された直後の編輯で、座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」、琴川寛「徴兵制と女子教育」などが載っている。「徴兵の詩」には金鐘漢、中野鈴子、李庸海などの詩が載っているのだが、その中の中野鈴子の詩。

あつき手を挙ぐ

都会、町、部落

何処にも

朝鮮の人たち満ち溢れ

働き、たたかひ

生活を打立て

話す言葉 国語正しく

われら朝夕

親密濃く深まりつつ

出征、入営を送る折々には

先んじて旗振り、万歳を叫ぶ

朝鮮の人たち

朝鮮の人等

手に力こもり、唇は叫びつつ

心の底に撤し得ぬものがあるならん
常にわれかく思ひ 心沈みし

今
朝鮮に徴兵令布かる

こころ新たに
あつき手を挙ぐ

この詩の第5聯「心の底に撤し得ぬものがあるならん / 常にわれかく思ひ 心沈みし」は反戦的と云えよう。日本語を話し、万歳で出征兵士を送るすがたを見て、心のうちを忖度している。「撤し得ぬもの」とは、皇民化政策に納得しない心情を抱く朝鮮民衆もいるだろうと推測している表現だろう。「心沈みし」という表現に詩人の真意が隠されている。

中野鈴子の中野重治の妹である。プロレタリア詩人として活躍した時期があり、兄の影響も強い。この詩が日本で発行された雑誌に載ったと仮定すると、当時の内閣情報局の傾向から見て伏字になったのではないかと考えられる。これは一つの推測だが、外地の日本語による言説は言論統制において内地よりもゆるやかだったのではないかと考えられる。

これは一つの例だが、『国民文学』研究の方向として、発表された作品を一括して「内鮮一体」に同調した作品とレッテルを貼らずに個々の作品を検討することが課題となる。